

明治期の横浜外国人居留地を通じた洋楽受容： ドーリング商会の活動を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): ドーリング商会, 洋楽受容 キーワード (En): Doering Co., Reception of Western Music 作成者: 越懸澤, 麻衣, Koshikakezawa, Mai メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/681

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



明治期の横浜外国人居留地を通じた洋楽受容

—ドーリング商会の活動を中心に—

The Reception of Western Music in Yokohama during the Meiji Period: a Case Study of Doering Co.

越懸澤 麻衣

Mai Koshikakezawa

はじめに

本論文は、明治期に横浜の外国人居留地で楽器や楽譜の販売を行っていたドイツ系の「ドーリング商会 J. G. Doering Co.」（資料によっては「デーリング」や「ドリンク」と記されているものもあるが、ここでは「ドーリング」に統一する）に焦点を当て、日本における洋楽受容の一側面を明らかにしようとするものである。横浜の外国人居留地全体の音楽活動については、これまでも演奏会の状況やピアノ製造などについて概観がなされ、その特殊性や意義が指摘されてきた¹⁾。しかし、個々の人物やメーカーについて詳細に踏み込んだ研究はない。そこで今回は、ケーススタディの一つとしてドーリング商会を取り上げ、未検証だったさまざまな一次史料を読み解くことにより活動の実態を検証する。これらの調査から明らかになる事実は、日本の洋楽受容の黎明期に西洋音楽に携わろうとした外国人がどのようにその活動を展開したのか、そしてそれが洋楽受容史にいかなる影響を与えたのかについて、興味深い示唆を与えてくれるだろう。

1 ドーリング商会の変遷

まず、本論文の中心となるドーリング商会の活動の変遷を概観する。先行研究においてドーリング商会について言及されるのは、そのほとんどが横浜の外国人居留地におけるピアノ製造との関連である。明治期の日本において、横浜の外国人居留地は西洋楽器製造の中心地であった。そこでは、日本で最初にピアノ製造の広告を出したクレーン&カイル Crane & Keilをはじめ、モートリー商会 Moutrie Co. やスウェイツ商会 Thwaites Co. といった欧米の技術者たち、そして周ピアノのような華僑の技術者などがしのぎを削っていた。そのなかのひとつが、ドーリング商会である。

明治時代の歴史的な日本のピアノとして、ドーリング製のピアノには2種類、すなわち「ドーリング・ハンブルク J. G. Doering Hamburg」と「ドーリング横浜 J. G. Doering Yokohama」の銘があることが確認されていた。そのため、ドーリングがハンブルクから横浜へ移住してきた楽器商であったことは周知の事実として語られてきた。

1-1 ハンブルクから横浜へ

とはいえ、ドーリング商会のハンブルクでの活動については、これまで詳細が何も知られていなかった。しかし筆者が今回ハンブルク市立古文書館 Staatsarchiv Hamburg に所蔵されている6通の「商業登記 Handelsregister」を調査し、いくつかの新事実が明らかになった。

最初に“ドーリング”の名が現れる文書は1855年10月1日付の「Firme=Protokoll」という公文書で、いわば登記簿のようなものである。これはドーリングがハンブルクで商業を始めるにあたって届け出たことを記録しており、次のように始まる。

本日1855年9月21日金曜日、ヨーハン・ゴットロープ・ドーリング Johann Gottlob Döring 氏がやってきて、工場をドーリング商会 *J. G. Döring Co.* という会社にするを宣言し、その所有者であることを証明した。²⁾

なお、ここに同商会の設立年が明記されているばかりでなく、「ヨーハン・ゴットロープ・ドーリング」という創設者のフルネームが記されていることも貴重な情報である。というのも、一般的に考えると奇妙なことだが、どの先行研究においてもドーリングについて言及するときにはいつも「J. G. ドーリング」であり、イニシャルはわかってもフルネームは不詳の人物だったからである。

さらに、この書類への「追伸」(Nr. 2)には、「本日設立したピアノ工場」、「長年の実践的な経験」によりピアノを「いつでも手ごろな価格で提供できるようにする」と述べられており、1855年の時点で、ドーリングはすでに熟練したピアノ製作技術を身に付けていたことがわかる。おそらく、他のピアノ工場の技術者として働いていたのであろう。

1-2 横浜での店舗と従業員の変化

すでにハンブルクでピアノ工場を開いていたドーリングは、どのような経緯で開国後間もない日本へも活動の場を広げようとしたのだろうか。このことについては、残念ながら今のところ情報はない。いずれにせよドーリング商会は1881（明治14）年、横浜に進出した。しかしながら、ハンブルクの史料によると、来日したのは同じイニシャルの「J. G. ドーリング」でも、創業者ではなく「ヨハネス・グスタフ・ドーリング Johannes Gustav Doering」なのである。

横浜での彼の足取りは、『ジャパン・ディレクトリー Japan Directory』でたどることができる。これは、横浜や神戸、札幌などの開港地で戦前まで発行されていた英語による在日外国商館名簿で、名前と住所、職業が記載されている³⁾。このなかにドーリングの名前が初めて現れるのが1881（明治14）年で、このときは109番地の「カイル商会 Keil & Co.」の従業員として記載されている（Japan Directory 1881: 37）。

1883年、109番は「I. G. ドーリング、ピアノ製造、修理、調律」（IとJはかつてのドイツ語では互換性のある文字であるため、ときにJではなくIと記されている）とその名が変わる（Japan Directory 1883: 40）。つまり、ドーリングの来日から2年ほどでカイルが引退し、同社をドーリングが引き継いだとみられる。実際、このころの広告には「I. G. Doering (Late Keil & Co.)」と、カイル商会の後継者で

あることが明記されている。

しかし、現存するドーリング商会の楽器の銘には「Estbl. 1874」と記されており、ドーリングがハンブルクで工場を創設した1855年とも、日本で独立した1883年とも一致しない。これは一体、何を表しているのだろうか。考えられるのは、横浜での楽器商の「原点」を示しているという可能性である。前述のように、ドーリングが来日して最初に働いたのがカイル商会だったわけだが、カイルも独立する前はウィリアム・アルメイダ・クレーン William Almeida Crane (1833～1903) とともにピアノの販売や調律を行っていた。そのクレーンの名が『ジャパン・ディレクトリー』に最初にピアノ調律師として記載されるのが、1874年のことなのである (Japan Directory 1874: 9)。

1894年以降は「J. G. Doering also Kobe and Tokyo」と記載されており (Japan Directory 1894: 102)、神戸と東京にも進出したことが示唆される。だが、具体的にこの二都市でどのように商売を展開していたのかについては不明である。

1895年、長らく拠点としていた横浜の109番地から横浜関内のメインストリートである本通りに面した52c番地へと移転した (Japan Directory 1895: 91)。そして1900年には75番地へ (Japan Directory 1900: 165)、1909年には73番地へ移転した (Japan Directory 1909: 452)。

従業員については、1895年には「6 Japanese」、1897年には「10 Japanese」が働いていたことが記されているように (Japan Directory, 1897: 83)、順調に規模を拡大していった。日本で最初にオルガンを製作し西川風琴製造所を設立した西川虎吉 (1849～1920) もその中のひとりである。彼の訃報記事では、西川が「明治九年横浜に來り西洋楽器製造の前途要望なるに早くも矚目し、斯道の専門家英人カイル氏及独人ドーリング氏に就きて研究を重ね」(『横浜貿易新報』大正9年1月9日) た旨が伝えられている。

ドーリング商会の名が最後に『ジャパン・ディレクトリー』に現れるのは、1911 (明治44) 年のことである (Japan Directory 1911: 525)。この閉店の事情については、節を改めて考察することにした。

なお、前述のように創業者が来日したわけではなかったため、一定期間はハンブルクと横浜に「J. G. ドーリング」というピアノ工房が並存していた。ハンブルク市へ廃業届 (No. 4150) が提出されるのは1887年11月29日のことで、「同年5月18日にJ. G. ドーリング商会の所有者であるヨーハン・ゴットロープ・ドーリングが亡くなったため」と説明されている。

2 楽器商として

ドーリング商会の活動の中心がピアノの販売であったことは間違いない。それは、ドーリングがもともとハンブルクで経験を積んだピアノ職人であったことを考えれば、納得のいくことであろう。しかし横浜では、ピアノを製作し販売していただだけでなく、さまざまな当時の一流ピアノの輸入販売も行っていた。また、輸入していたのはピアノに限らず、多種多様な楽器に及んでいた。

三

2-1 広告からみる取り扱い楽器

以下、当時の雑誌などに掲載されたドーリング商会の広告をもとに、同商会が取り扱っていた楽器に

ついでまとめる。広告を見出したのは、英字新聞の『ジャパン・ディレクトリー』、『ジャパン・ウィークリー・メール The Japan Weekly Mail』、そして『ミークルジョンズ・ジャパン・ディレクトリー Meiklejohn's Japan Directory』である。今回の調査では、日本語での主な音楽雑誌には広告を見つかることができなかった。これは、ドーリングが外国人居留地に住む人々を主な顧客と見なしていたからではないだろうか。こうした外国人居留地の「閉じられた」性格は、とりわけ開港後の初期にはさまざまな面で顕著であったことから、ドーリングも同様の態度を取ったことは不思議ではない。

確認できた最初の広告は、1883（明治16）年の『ジャパン・ディレクトリー』に掲載されたものである。ここには、「ピアノ製造、調律、修理。最良のメーカーのピアノとオルガンの新品と中古品の在庫あり」と記されている。ここには具体的なメーカー名は記されていないが、「Best Makers」と複数形になっていることから、いくつかの楽器メーカーとすでに取引があったものと思われる。また、図1に示したように、広告の文字が「製造」よりも「調律&修理」の方が太字で目立つように書かれていることにも注目したい。これはおそらく、当時の居留地には外国から自分のピアノを持ちこんだ人が多くいたものの、それを調律したり修理したりする人が十分ではなかったことから、ドーリングはその需要を見込んだのであろう⁴⁾。



【図1 The Japan Directories, 1883】

続いて1888（明治21）年の広告は、具体的にメーカー名が記されており、さらに「ピアノ類。風琴類製造及ビ修繕師 横濱百九番館 ジエ、ジー、ドーリング」と簡単な日本語も付されている。日本人へと顧客を拡大しようとしていたのだろうか。この広告に挙げられているメーカーは以下の通りである（図2）。

【オルガン】

- ・ スミス・アメリカン・オルガン会社 Smith American Organ Company (ボストン)



【図2 The Japan Directories, 1888】

・「有名な」チェーズ・オルガン会社 A. B. Chase Organ Company (ノーウォーク)

【ハルモニウム】

・「よく知られた」ブルガー H. Burger (パイロイト)

【ピアノ】

・イーバツハ Rud. Ibach Sohn (バーメン)

・フェドール・ビング Fedor Bing (ドレスデン)

・ユリウス・ブリュートナー Julius Bluethner (ライプツィヒ)

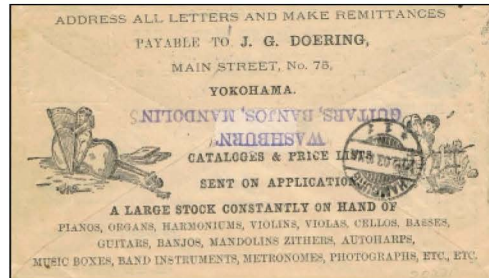
・ヴァイディヒ W. Weidig (イエーナ)

ここから読み取れるように、ドーリング商会ではドイツとアメリカから鍵盤楽器の輸入販売を行っていた。これらのメーカー名をみると、けっして「誇大広告」ではなく、実際に当時の一流のメーカーの楽器を扱っていたことがわかる⁵⁾。

翌1889(明治22)年の広告には上記の鍵盤楽器に加え、他にもさまざまな楽器を扱っている旨が宣伝されている。「ヴァイオリンやチェロ、コントラバス、ギター、バンジョー、自動ピアノ、“チェレステイナ”も多くの在庫がある」とのことである。実際、1880年代に撮影されたとされる109番地にあったドーリング商会の写真からは、「ピアノ、オルガン、シエロー [=チェロ]」という看板が掲げられていたことが確認できる⁶⁾。バンジョーや自動ピアノは、まさにこの時代の賜物であり、ドーリングが当時の音風景に貢献していたことがうかがえる。

さらに1900(明治33)年の広告では、楽器ばかりでなくメトロノームや弦楽器の弦、各楽器の教則本、ピアノやオルガン用のランプや蠟燭(当時のピアノには燭台を備えた楽器が多かった)も取り扱っていることが謳われている。これは現在の楽器店のイメージに近く、楽器を演奏するのに必要なありとあらゆるものが手に入るような豊富な品揃えである。

このように、徐々に取扱商品を拡大し、積極的に宣伝していたドーリング商会だが、1900年代に入るとなぜか雑誌等には広告が掲載されなくなる。ただし、まったく手がかりがないわけではない。1903年11月17日付の葉書(図3)には、ピアノ・メーカーとしてブリュートナーとオットー Otto の名前のみが明記されていることから、この2社がこの頃の主力商品だったものと想像される。ここからはドーリング商会のカタログや価格リストも存在していたこともわかるが、実物の現存は確認できていない。



【図3 1903年11月17日付の葉書 (Bernd Lepach氏提供)】

2-2 ドーリング商会の顧客

では、誰がドーリング商会で楽器を購入したのだろうか。帳簿の存在が確認できないため、すべてを明らかにすることはできないが、ドーリングが出した手紙からドーリング商会の顧客だったことが証明される人物がいる。それは「ケーベル先生」として知られる、東京帝国大学で哲学の教授を務め、東京音楽学校でもピアノを教えていたラファエル・フォン・ケーベル Raphael von Koeber（1848～1923）と、東京帝国大学農学部で林業を担当していたオイスタッハ・グラスマン E. Grassmann である（図4）。ここから推測するに、ドーリング商会は外国人居留地での人脈を生かし、ドイツ人、それもお雇い外国人として来日していた人物と交流を持っていた。



【図4 1894年6月9日付の葉書（Bernd Lepach氏提供）】

さらに、特筆すべきは東京音楽学校もドーリング商会から楽器を納入していたことである。小岩信治氏の調査⁷⁾によれば、東京藝術大学音楽学部に保管されている納入簿には、1899～1890（明治32～33）年に少なくとも1台の楽器をドーリング商会から購入したことが記録されている（ただし、この楽器は現存していない）。この楽器がドーリング製だったのか輸入楽器だったのかは不明だが、いずれにせよ東京音楽学校との関わりは、本邦の洋楽受容の展開を考える上では重要である。

また興味深いことに、ドーリング商会では演奏会用に楽器を提供することもあった。その例が、東京音楽学校で教師を務めたオランダ人のギヨーム・ソーヴレー Guillaume Sauvlet（1843～1902）が1889年5月30日に横浜のパブリック・ホールで開催した音楽会である。彼の日本での最後の音楽会となったこの日の模様については、1889年6月1日付の『ジャパン・ウィークリー・メール』が詳しく伝えている。非常に好意的な評価を与えているこの記事は、「演奏に付随する非常に貴重なものである2台の素晴らしいブリュートナー・グランド・ピアノが、J. G. ドーリング氏の貸与であったことを記しておくべきだろう」という一文で締め括られている（Japan Weekly Mail 1889: 527）。ただ、このようにピアノ業者からコンサート・ピアノを演奏会のために借り入れる方法は、ソーヴレーがそれ以前に香港でも行っていたことから（中村1993: 737）、ソーヴレーの依頼で特別に応じたのかもしれない。とはいえ、必ずしも会場にグランド・ピアノが常設されていなかった当時であれば、このような楽器の貸与もときに行っていた可能性は十分にあるだろう。

2-3 現存するドーリング商会がたずさわった楽器

ドーリング商会がたずさわった楽器はどのようなものだったのだろうか。楽器の特性については、文献資料からでは詳細がわからないため、数少ない現存する楽器を研究対象とするほかない。今回の調査で現存が確認されたドーリングの銘を持つ楽器は、1) ドーリング製のピアノ：5、2) ドーリング商会が輸入したピアノ：1、3) ドーリング製のピアノ以外の楽器：2、の計8つである。

1) ドーリング製のピアノ

・アップライト・ピアノ「天使のピアノ」(伝1885年)、国立市・滝乃川学園所蔵(図5)

このアップライト・ピアノは1884(明治17)年、石井筆子(1861～1944)と最初の夫であるおがしまはたす小鹿島果(1857～1892)との結婚祝いに父・渡辺清がドーリング商会に注文し、翌年3月に完成した楽器だと伝えられている(眞杉2000:8)⁸⁾。筆子は当時、1884年に開校した華族女学校でフランス語教師をしていたが、この頃東京で筆子と交流を持ったデンマーク人のヨハンネ・ミュンター Johanne Münter (1844～1921)は、日本滞在から約10年後に回想録としてコペンハーゲンで出版した『日本の思い出 Minder fra Japan』(1905年)のなかで、ピアノを取り巻く状況を次のように述べている。

日本でも、ピアノを演奏するという文化がかなり前に導入されていて、小鹿島夫人の生徒たちが熱心に練習していました。私は日本の女の子たちに音楽を教えるという約束を小鹿島夫人にしていたのですが、残念ながら、その約束を守ることはできませんでした。というのも、すでに優秀なイギリス人の先生がいることが分かり、でしゃばった真似をしたくなかったからです。(長島2014:116-117)

小鹿島と死別した筆子は1891年、日本で初となる知的障がい者のための福祉施設、滝乃川学園の創設者である石井亮一(1867～1937)と再婚し、このピアノも共に滝乃川学園へやってきた。キリスト教の信仰に支えられた同学園では、チャペルで礼拝が行われ、聖歌を筆子がこのピアノで伴奏したと考えられている(眞杉2000:24)。

筆子の没後は、滝乃川学園日本館2階の園長室に廃物同然で置かれていたという。それを1998年、(社)日本ピアノ調律師協会の協力のもと、栃木県真岡市のピアノ調律師、小野哲氏が修復を行い、製造当時の姿がよみがえることとなった(眞杉2000:34-35)。その後、このピアノを用いた演奏会が開催されたり、CD録音が発売されたりと、ドーリング・ピアノの音を実際に聴くことができるようになっていく。

2007年には「筆子・その愛——天使のピアノ——」という題の映画が公開され、これを機に「天使のピアノ」は一躍有名になった。“ドーリング”の名が今日知られているのは、この楽器のおかげといっても過言ではない。

このアップライト・ピアノは、中央に「J. G. DOERING YOKOHAMA」の銘があり、内部の右上にも「J. G. Doering」と記されている。音域はA2-a⁴の85鍵と、現在の標準的な数よりも高音が3鍵少ない。アクションは、「L. ISERMANN HAMBURG」と書かれたオーバーダンパーが用いられている。オーバーダンパーとは、ダンパーとハンマーの位置が現在のアップライト・ピアノとは逆になっているもので、当時よく採用されていた機構である。製造元のイゼルマンは、創業者のI. C. L. イゼルマンがいく

つかのピアノのアクション工房で修行を積んだ後 1842 年に独立した、ドイツで最初のアクションに特化した工房であった。ドイツではそれまで、それぞれのピアノ・メーカーが全体の構造に合わせてアクションを独自に製作していたが、信頼できる品質、かつ安価だったこともあり、イゼルマン製のアクションはすぐに成功を収め、ドイツの多くの主要メーカーが採用するようになっていた (Dolge 1972 (1911): 237-238)。また、フレームには「G. H. C. PEYER HAMBURG」の銘がある。このように、アクション、フレームともにドーリングの地元ハンブルクから取り寄せていたという事実は重要である。すなわち、「製造」と謳ってはいても、精巧な技術を要するアクションなどの部品までは自社で製造しなかった（あるいは、できなかった）のである。ただし、こうした製法は、ドーリングに限らず明治期の日本のピアノ・メーカーにはよくあることであった。

特徴的なのは華麗な装飾である。側面の繊細な装飾もさることながら、ピアノの正面中央には、豪華な木彫りのなかに、子供を抱いた天使の彩色した写真が、ガラスに焼き付けられてはめ込まれている。「天使のピアノ」という愛称の由来である。このような装飾は当時の楽器としても非常に珍しい。



【図5 滝乃川学園所蔵のドーリング・ピアノ（2017年5月22日、筆者撮影）】

・アップライト・ピアノ（20世紀）、立川市・国立音楽大学所蔵

国立音楽大学楽器学資料館に所蔵されているドーリング製のアップライト・ピアノは、その来歴は不明だが、非常に珍しい特徴を持っている（国立音楽大学 2016：180-183）。第一に、鍵盤を折りたたむことができるという点が挙げられる。こうした特徴を持つドーリング製のピアノは、他には確認できていない。また音域も C-c⁴ の 61 鍵とかなり狭く、幅 1070mm、総高 1143mm とコンパクトな楽器と言える。アクションはベルリンのオスカー・コーラー社 Oscar Kohler のもので、こちらは現在の機構と同じアンダーダンパーである。製作年は不詳で、目録には「20世紀」としか記されていないが、このダンパーから推測するに、少なくとも「天使のピアノ」よりも新しい時期の楽器であることは確かである。というのも、世紀の変わり目ごろ、ダンパーの主流はオーバーダンパーからアンダーダンパーへと移り変わったからだ。いずれにせよ、この折りたたむための鍵盤を持つピアノからは、ドーリング商会在非常に野心的にさまざまなピアノを取り扱っていたことがわかる。

・個人蔵

インターネットでの調査を通じて、ドーリング商会の銘のあるアップライト・ピアノが、個人蔵として少なくとも3台現存していることが明らかとなった（相模原市、神戸市、所在地不明）。このうち、前者2台は銘が「J. G. DOERING HAMBURG」であり、ハンブルクの工房から輸入されたものである可能性が高い。

2) ドーリングが輸入したピアノ

今回確認できたドーリング商会が輸入したピアノは、ベルリンのカール・オットー社 Carl Otto 製のアップライト・ピアノである。筆者は、この楽器の修復を2016年に行った（有）伊藤ピアノ工場の伊藤正敏氏に、このピアノを実際に見せていただく機会を得た。

このオットー・ピアノは、伊藤氏によると、東京音楽学校の師範科を卒業した寺尾満里子氏が、明治の終わり頃にドイツ人から譲り受けたもの、と伝えられているようだ。それが娘、孫、ひ孫と大切に愛用され続けてきたのだという。もともとドイツ人の所有だったという事実は、ドイツ人をはじめとする外国人を主な顧客としていたドーリング商会の特徴を表している。

楽器としての特性は、音域が85鍵であること、オーバーダンパーが使われていること、燭台が2つ付けられていること、そして脚に装飾が施されていることなど、滝乃川学園の「天使のピアノ」と類似している。

譜面台の下の銘には中央に「C. OTTO BERLIN」と書かれ、その両脇にさまざまな博覧会で受賞した金メダルのシールが計8個貼られている。最後の金メダルが1891年のジャマイカ国際博覧会のものであるため、1891年以降に製作されたことは確実である。オーバーダンパーが使用されているため、20世紀に入ってからの可能性は低く、1890年代に製作されたのではないかと推測される。譜面台の上や側板内側など、複数か所に「J. G. DOERING」のラベルが貼られており、輸入会社として、かなりアピールに力を注いでいたことがうかがえる。

3) ドーリングのピアノ以外の楽器

広告には、さまざまな楽器が扱われている旨が記載されているが、ピアノ以外の楽器で現存するものは少ない。

「J. G. Doering Yokohama」というラベルが貼られている楽器は、今回二件確認できた。一つ目は国立音楽大学楽器学資料館所蔵のミュージックボックスで、二つ目はロンドンのホーニマン博物館・庭園 Horniman Museum and Gardens に所蔵されているオクタヴィン Octavin というファゴットとクラリネットを混ぜ合わせたような木管楽器である。

ドーリング商会のたずさわった楽器は、今回調査できたもの以外にも個人蔵として眠っている可能性は十分に考えられる。さらに多くのデータを集められるよう、今後も調査を継続していきたい。

3 楽譜商として

これまで言及されてこなかったドーリング商会のもう一つの重要な側面は、楽譜商としての活動である。雑誌広告には楽器の宣伝しかみられないが、ドーリング商会は楽譜の輸入販売にも力を入れていた。

たとえば東京音楽学校はドーリング商会から数多くの楽譜を納入していた。このことは、楽器の場合とは異なり、現在も東京藝術大学附属図書館にドーリング商会のスタンプ「J. G. DOERING DEALER IN MUSIC and MUSICAL INSTRUMENTS YOKOHAMA」が押された楽譜が多数所蔵されていることから確認することができる（図6）。



【図6 ドーリング商会の印】

それらの楽譜の多くを占めているのが、1719年に創設されたライプツィヒの楽譜出版社、プライトコプフ・ウント・ヘルテル社 Breitkopf & Härtel（以下、プライトコプフ）から出版された楽譜である。こうした楽譜の輸入状況については、ライプツィヒにあるザクセン州立古文書館 Sächsisches Staatsarchiv に所蔵されている、プライトコプフからドーリング商会に宛てた60通以上の手紙の控え Kopiebuch が多くの情報を与えてくれる。これはプライトコプフ側が発送した手紙のみであり、往復書簡としては読めないものの、ドーリング商会がどのような依頼をしたのかなどを推測する手がかりを豊富に含んでいる。また、その膨大な数が示しているように、ドーリング商会がかなり頻繁にプライトコプフへ注文していたことも明らかである。

ドーリング商会とプライトコプフとの最初のコンタクトは、実は楽譜の輸入に関してはなかった。1893年に端を発する両社の書簡は、お雇い外国人として東京音楽学校で教鞭をとったルドルフ・ディットリヒ Rudolph Dittrich（1861～1919）の《日本楽譜——6つの日本民謡 *Nippon Gakufu: Sechs Japanische Volkslieder*》の出版をめぐるものから始まったのである。この日本民謡にディットリヒがピアノ伴奏を付けた楽譜は、ドーリング商会が日本、中国、香港の販売特約店となっており（図7）、1894年の出版に先立ち約1年間頻繁に連絡を取り合っている。この曲集は、ライプツィヒ大学の音楽学の教授フーゴー・リーマン Hugo Riemann（1849～1919）が、当地で1902年に「日本音楽について」と題した講演を行った際にも実例として演奏されたほど、ドイツでも知られた曲集であった（Riemann 1902: 209-210）。そこにドーリング商会も販売だけでなく製作過程から積極的に関わっていたことは興味深い事実である。この曲集は好評だったようで、1903年プライトコプフは「日本音楽に関して、私たちはディットリヒの作品のよい点を十分理解しています。もしこのような領域の新しい作品をお送りくだされば、喜んで出版いたします」と伝えている（1903年、請求記号578）。



【図7 ディットリヒ《日本楽譜》のタイトルページ】

ディットリヒの楽譜が出版されたのちも両者のやりとりは続く。だが手紙の大部分は楽譜の注文を引き受けたことや、その金銭の請求など事務的な内容である。

しかし中には興味深い記述も見いだせる。たとえばブライトコプフの方から新しいメトロノームの試供品を送り、日本で売れそうかどうかを尋ねている（1903年、請求記号578）。またブライトコプフがドイツのメーカーにドーリングを仲介したことがたびたびあったことも記録されており、「あなたの望み通り、ベルリンのキャロル・オットー氏への荷物を送りました」（1903年9月26日付、請求記号581）という一文は、オットー・ピアノの輸入にブライトコプフが関与していた可能性を示唆している。その他、パリから『ジュルナル Le Journal』などの雑誌を取り寄せたりもしている（1903年10月29日、請求記号582）。また、ピアノやチェロの弦もブライトコプフから輸入している（1903年、請求記号578）。特筆すべきは、ブライトコプフがドーリング商會を「日本における重要な取引先」と捉え、さらなる販路拡大を期待していたこと（1904年5月31日付、請求記号597）であろう。

興味深いことに、この活動には一時期、ドイツ人音楽家アウグスト・ユンケル August Junker（1868～1944）が関わっていた。東京音楽学校のお雇い外国人として同校のレベル向上に多大な尽力をしたユンケルは、東京音楽学校に招聘された際に提出した履歴書のなかで「ドーリング商會で音楽図書楽譜の販売に従事していた」旨を記している。顧客ばかりでなく従業員の面でも、ドーリングは積極的にドイツ人音楽家と交流を持ち、二国間の架け橋となっていたと言えるだろう。

4 閉店の背景

順調に業績を伸ばしているかにみえたドーリング商會だが、20世紀に入った頃から徐々に経営が揺らぎ始めた。

このことは、ブライトコプフからの手紙にも如実にも現れている。というのも、1903年頃から多くの手紙が「再び大きな契約をしてくださることを願っています」というような文言で締められるように

なるからだ。1908（明治41）年7月7日の『ジャパン・ガゼット Japan Gazette』では、ドーリング商会の持つ楽譜いっさいをオークションにかける旨が伝えられている。おそらく経営が悪化し、少しでも資金を得ようとしたのだろう。そして1909年1月14日と3月17日の2度にわたり、ドーリングはブライトコプフからの輸入を取りやめること、そしてそれまでの未払い分を支払えないことを伝えたようだ。この2通への返信（1909年6月30日付、請求記号755）で、ブライトコプフは「あなたの手紙はまったく理解できない」と強い口調で怒りを表している。それは「これまでの長い付き合い」をブライトコプフが重視していたからであり、「日本における現状が、あなたにとってけっして満足のいくものではないことはわかっていますが、それでも再び良い時代が来ると信じて続けませんか」と説得してさえいる。そして「再び交渉できる日が、できるだけ早く訪れることを期待しています」と結ばれているのだが、おそらくその日は来なかった。この手紙を最後に、ブライトコプフはドーリングに手紙を出していない。

ドーリング商会は経営を立て直すことができず、1912年に閉店した。その際、スウェーツ商会に勤めていた周筱生に一切を譲渡し、周はそれをもとに店を開業したのだという（吉田1933:30）。つまり「周ピアノ」は、材料や機材の点ではドーリング商会の系譜だったのである。その後のドーリングの足取りはわかっていないが、『ジャパン・ディレクトリー』に記載がなくなることから、日本を出国したのではないかと思われる。

なぜ、ドーリング商会は閉店に追い込まれたのだろうか。この問いに答えることは容易ではない。しかしその原因のひとつは、国産楽器・楽譜の興隆であろう。洋楽の普及により需要も伸びていたが、それ以上にライバル会社も成長しており、競争は激しくなっていたと想像される。ピアノでいえば、同じ横浜の西川楽器や浜松の日本楽器製造（現ヤマハ）などが安価で良質の楽器を作るようになっていったことは、少なからず打撃となったはずである。

5 まとめ

ドーリング商会は、明治時代に横浜の外国人居留地でピアノを製造・販売していた数あるメーカーのひとつにすぎない。しかしその中でも傑出しているのは、ドーリング商会がピアノやオルガンに特化していたのではなく、音楽を演奏する総合的な環境を整えようとしていたことである。すなわち、ピアノを製造して販売するのみならず、調律や修理といったアフターケアを行ったり、ピアノ以外の楽器や楽器に関わる備品を販売したりもした。また楽譜も豊富に取り揃えていた。これはいわばソフトとハードの関係にあるもので、楽器だけあっても楽譜がなければ演奏することはできない。今日でこそ多くの楽器店で楽譜も同時に販売しているが、当時の楽器商ではよくあることではなかった。このように、まだ日本の音楽界が十分に熟していない時期にあって、さまざまな音楽実践と音楽ビジネスの可能性を提供したという点で、ドーリング商会の活動は特筆に値するものである。

楽器や楽譜の輸入に際して、ドーリングは出身地のドイツを中心に、当時の一流の会社とコンタクトを取っていた。ドーリングの行動力、そして審美眼はたしかなものだったと言えるだろう。こうして、日本に「本場の」音楽をもたらしたことも重要である。ブライトコプフ&ヘルテル社の書簡がはっきりと示しているように、この時期は海外の業者も日本を新たな市場として認識し始めた頃であり、海外か

らみても、日本の窓口としてドーリング商会は貴重な存在だった。

明治時代の洋楽が徐々に普及しつつあった時代、ドーリング商会の果たした役割は、横浜の外国人居留地を超えて、音楽をめぐる日本と西洋との交流の重要な一コマなのである。

参考文献

[一次資料]

- ・ Staatsarchiv Hamburg: 231-3_B6213
- ・ Sächsisches Staatsarchiv: Kopierbüchern im Bestand 21081 Breitkopf & Härtel
- ・ *The Japan Directory*
- ・ *The Japan Gazette*
- ・ *The Japan Weekly Mail*
- ・ 『横浜貿易新報』

[引用文献]

- ・ Dolge, Alfred. *Pianos and Their Makers: A Comprehensive History of the Development of the Piano from the Monochord to the Concert Grand Player Piano*, Dover Publications, 1972.
- ・ Riemann, Hugo. "Ueber Japanische Musik." In *Musikalisches Wochenblatt*, 1902, pp. 209-210.
- ・ 国立音楽大学楽器学資料館編『ピアノ——国立音楽大学楽器学資料館所蔵目録』国立音楽大学、2016年。
- ・ 長島要一『明治の国際人・石井筆子——デンマーク女性ヨハンネ・ミュンターとの交流』新評論、2014年。
- ・ 中村理平『洋楽導入者の軌跡——日本近代洋楽史序説——』刀水書房、1993年。
- ・ 眞杉章『天使のピアノ 石井筆子の生涯』ネット武蔵野、2000年。
- ・ 横浜市歴史博物館・横浜開港資料館編『製造元祖 横浜風琴洋琴ものがたり』横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団、2004年。
- ・ 吉田史郎「横浜の音楽界——楽器の歴史と洋楽と邦楽」『大横浜』30巻10号、1933年10月、29～32頁。

[ウェブサイト]

- ・ Horniman Museum & Gardens
<http://www.horniman.ac.uk/collections/visitor-tags/object/12712> (2017年8月25日閲覧)
- ・ MEIJI TAISHO 1868-1926: SHOWCASE
<http://showcase.meijitaisho.net/> (2017年8月25日閲覧)
- ・ Meiji Portraits
<http://www.meiji-portraits.de/index.html> (2017年8月25日閲覧)
- ・ 国立音楽大学楽器学資料館
<http://www.gs.kunitachi.ac.jp/ja/> (2017年8月25日閲覧)

謝辞

研究を遂行するにあたり、以下の方々にご協力いただいた。記して感謝を捧げる。

Dr. Thekla Kluttig (Sächsisches Staatsarchiv, Leipzig)

Bernd Lepach (Meiji Portraits 主宰)

Prof. em. Dr. Helmut Loos (Universität Leipzig, Institut für Musikwissenschaft)

伊藤正敏氏 ((有) 伊藤ピアノ工房)

小岩信治氏 (一橋大学言語社会研究科、教授)

米川覚氏 (石井亮一・筆子記念館、館長)

註

- 1) 横浜での音楽全般については、齋藤龍『横浜・大正・洋楽ロマン』（東京：丸善、1991年）、横浜でのピアノ製造については、横浜市歴史博物館・横浜開港資料館編『製造元祖 横浜風琴洋琴ものがたり』（横浜市歴史博物館・（財）横浜市ふるさと歴史財団、2004年）に詳しい。
- 2) Heute Freitag den 21n Septembr. 1855 / erschien Hn. Johann Gottlob Döring / und erklärte am 24n hieselbst ein Fabrik=Geschäft / in Firma / J. G. Döring Co. / errichten zu wollen und der alleinige Inhaber diesen Firme zu sein.
- 3) 詳細は、立脇和夫「戦前期の“ジャパン・ディレクター”——その所在調査と歴史研究——」『東南アジア研究年報』（27）：109-126を参照のこと。
- 4) 横浜に最初にピアノがもたらされたのは1859年のことで、S. R. ブラウン夫人がアメリカから成仏寺に運び込んだものである。また調律に関する最初の記事は、1864（元治元）年の『ジャパン・ヘラルド』におけるチザム侯爵のものである（横浜市歴史博物館2004：6-7）
- 5) イーパッハやブリュートナーは現在も続くピアノ会社で、社史に関するアルヒーフも備えているが、ドーリング商会とのやりとりのあった時期については史料が焼失しているため、ピアノの輸出入について調査することはできない。
- 6) この画像は、ウェブサイト「ショーケース」にて閲覧できる。
http://showcase.meijitaisho.net/entry/kimbei_creek_yokohama.php（2017年8月25日閲覧）
- 7) 科研費プロジェクト「20世紀序盤の本邦における和洋の共鳴——楽器の響きから考えるピアノ文化」（基盤研究（C）2015-17年度、研究課題番号15K02100）
ご厚意により未公表のデータをご教示いただいた。
- 8) ただし、石井亮一・筆子記念館の館長を務める米川覚氏に伺ったところ、この楽器の由来は同館の関係者の間で言い伝えられてきたことであり、これを裏付ける史料は残されていないという。

※本研究は、笹川科学研究助成による。